

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

太平洋地域の古写真資料群に関する分析から日本人の太平洋コレクション形成を探る<共同研究：日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究：国立民族学博物館所蔵朝枝利男コレクションを中心に>

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 典生 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00009887">https://doi.org/10.15021/00009887</a>

# 太平洋地域の古写真資料群に関する分析から日本人の太平洋コレクション形成を探る

丹羽 典生

筆者が今回は始める共同研究「日本人による太平洋の民族誌的コレクション形成と活用に関する研究」は、国立民族学博物館所蔵の朝枝利男コレクションを中心に日本人の太平洋資料との関わりを研究するものである。同コレクションは、太平洋に関する写真約6千点及び探検のさなかにつけられた日記や描かれた絵画などの付属資料からなる。アメリカで結成された探検隊の一員として朝枝が残したこれらの記録は、失われた自然や文化を今に伝える貴重な資料となっている。しかしヨーロッパ・日本・アメリカに資料が散在しているため十全に整理・分析されてこなかったこと、太平洋地域の研究者の精査を経ないことから、コレクションは十分に活用されていない。あるいは活用するための研究上の整備が不十分なまま置かれているというべきかもしれない。

実際、写真が撮影されたのが1930年代と人類学関連分野では現在の主流な学問の流れと隔離していること、探検隊を率いた人物は公的機関所属の研究者ではなくアメリカの大富豪であったことなどは、コレクションが一昔前の世界に属していることを物語ってもいよう。十全な学術利用に遅れをもたらした背景要因であることは間違いない。本共同研究は、そうしたもろもろの問題点を突破し、資料を研究の素材とするための試みである。

朝枝利男コレクションの面白さに気がついた筆者は、国立民族学博物館が先導していたフォーラム型情報ミュージアムのプロジェクト（以下、フォーラム型プロジェクト）の枠組みを活用して、2018年度より2年間にわたりコレクションに含まれる膨大な写真資料をデータベース化する作業を開始した（「民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築——オセアニア資料を中心に」）。今回は始める共同研究は、この公開予定のデータベースに基づきコレクションの資料的特質の解明をもくろむものである。そう書くと堅苦しくなるかもしれないが、有り体にいうと、国内外の専門家を招いて行ったデータベース構築作業は非常に充実したものであり、その作業のなかで蓄積された写真資料に関する調査報告を文章化しないままにとどめておくのはもったいないと考えたということである。

## 共同研究を通じて考えたいこと

共同研究の進め方としては、以下を想定している。まず太平洋の歴史と文化に通じた研究者が参集して、コレクション

の人類学的・民族学的な情報と過去の活用履歴を精査することからはじめる。各写真資料の撮影年・撮影場所及び探検隊の名称の確認作業はある程度済んでおり、データベースに記載してある。しかるに被写体の調査についてはまだ不十分である。専門家の精査をまつことで、写真を一層深く読み込むことができようのだ。

同時にコレクションの総体としての意義についても考えていきたい。先述したように朝枝利男に関わる資料は世界各地に散在している。ほかならぬ本館に残されている資料は、そのうち朝枝が個人的に選別して残した、彼との関わりの深いものという側面がある。そこで本共同研究会では、日本人による太平洋資料コレクションの収集史という視点から、本館の朝枝利男コレクションを近代日本における太平洋資料収集



標本採集中の朝枝利男（ハワイ・カウアイ島、1936年11月、撮影者不詳、データ番号 X0078533、国立民族学博物館朝枝利男コレクション）。

### 丹羽 典生（にわ のりお）

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は、社会人類学、オセアニア地域研究。論文に、「探検家朝枝利男の修業時代—1930年のアメリカ探検隊参加までを中心に」『国立民族学博物館研究報告』46(2): 349-368 (2021年)、「探検家朝枝利男の後半生—アメリカ日系人収容所での生活から博物館での活躍まで」『経済志林』88(3): 21-42 (2021年) などがある。

の歴史に位置付ける作業を行いたい。

日本人の太平洋での収集に関しては、やはり植民地との関わりからミクロネシア中心で研究が進んできた印象がある。共同研究では、ポリネシアとメラネシアをふくめて、ひろく太平洋の島嶼地域のなかで日本近代におけるコレクション形成の関わり方の一端を読み解いていくことを目指している。この作業に当たりこれまでのフォーラム型プロジェクトで培ってきた海外の博物館とのネットワーク（朝枝利男コレクションとかかわる資料を収蔵する博物館・研究機関の学芸員）からの助力を得ることができるのは大きな励みとなっている。

やや大風呂敷をひろげると、関連コレクションを有する欧米の博物館、収集された側の太平洋の人びとの知見を加味して、大航海時代以降に形成された日本人による太平洋コレクションの特質と問題点の解明の一助にならないかと期待している。そのため必然的に収集行為に関わる倫理的側面が論点として関わってこよう。実際、朝枝利男コレクションのなかには、現在であれば撮影により厳しい倫理的判断が迫られる写真（たとえば、墓地・埋葬地の様子や病人の姿など）も、わずかながら含まれているからである。本共同研究では中心的な主題とならないであろうが、近年盛んに議論されている重要な点なので、将来的な研究のためにも丁寧に記録を整理していきたい。実際、筆者が見た限りでは、海外の博物館に収蔵されている探検隊記録には見つからない、人骨の収集の過程が朝枝利男コレクションでは活写されている可能性があるのだ。

### 共同研究を通じて目指すもの

最後に本共同研究を通じて何を目標としているのか述べたい。研究会をはじめた際のつねとして、かなり野心的に記すことをお許し頂きたい。ひとつめは、日本における太平洋地域コレクション形成史の一端を解明することである。日本の植民地であったミクロネシアに偏重していたコレクション形成史について、太平洋全体の視点からその歴史的特徴についてある程度の見取り図が描けないかと期待している。これは太平洋の日本植民地史にモノの視点から光を当てる近年の人文系の研究領域に対する貢献も意識している。

ふたつめは、伝統文化の復元と現在の文化への創発を促すことである。写真資料を中心とする共同研究であるため、太平洋地域の伝統文化の姿を比較的容易に可視化できる。文字



卵を抱えるカツオドリ属のなかま（アメリカ合衆国領バルミラ島、1933年、朝枝利男撮影、データ番号 X0076544、国立民族博物館朝枝利男コレクション）。

記録だけではイメージが浮かびにくい事象への視覚的な理解が可能となるわけである。そうした画像・映像には、急激な社会変化の結果として失われた伝統文化の要素（入れ墨、カヌー、埋葬、舞踊等）も、数多く含まれている。それらは、近年先住民の文化として再評価されており、将来的には文化復興に活用される可能性が含まれている。

本研究は過去の正確な再現だけではなく、現在それらが現地の人にどう認識され、政治や芸術の分野でいかに創発的に活用されていくかで射程にいられている。実際、フォーラム型プロジェクトの段階では、ソロモン諸島の博物館での展示を計画していた。展示案はすでに完成し、あとは実行するだけとなった段階で、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大がはじまってしまった。共同研究会の期間のあいだに世界の混乱が収まり、途中で頓挫している展示の計画が再開することも密かに願っている。

みつめは、国際的な発信とその波及効果があげられる。欧米の博物館には本館の朝枝利男コレクションと関連する収蔵資料があるが、十分に活用されていない現状にあることはすでに触れた。本研究を通じて、これらのコレクションを過去の社会を分析する際の基盤となる重要な資料へと転換することができるのだ。ここではまさに基盤研究の推進を通じた、国際的な研究成果の波及が文字通りの意味で接近可能となるのである。